九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

図書館の目指すべき方向 ： ライブラリアンと語る

有川, 節夫
九州大学総長

https://hdl.handle.net/2324/16484

出版情報：丸善ライブラリーニュース. 9, pp.1-3, 2010. 丸善株式会社
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

図書館の目指すべき方向
～ライブラリアンと語る～　後編

九州大学総長　有川 節夫

濵﨑　昨年、入学式の総長挨拶の中で「日曜日の夕方から金曜日の夕方まではしっかり勉強して、週末には、それ以外のことを楽しむ。こういうことを習慣化し、オンとオフを明確に切り分け、メリハリの利いた学生生活をエンジョイしてほしいと思います。特に、図書館で参考書やインターネット等を使いながら勉強することをお勧めします」というお言葉がありました。図書館としましても、そのような学生の活動やニーズに適応するための新しい取組みが必要と考えております。ここからは、図書館が目指すべき方向について、図書館職員から個別にお聞きしたいと思います。

堀　大学図書館に求められている新しい役割として、学習の場としての図書館、教育支援ということが盛んに言われるようになってきました。さきほど有川先生のお話で「学生が行かずに居られなくなるような学問的な雰囲気」というお言葉もありましたが、図書館が活気に満ちた場となるためには、「集い」や「出会い」がキーワードとなるような気がします。

　九州大学では、２００９年４月、伊都キャンパスの講義棟に図書館機能を備えた学習交流スペース「嚶鳴天空広場"Q-Commons"」がオープンし、連日学生で賑わっています。図書館が、集いの場、出会いの場としての役割を果たすために、図書館として、あるいは大学として、どういうことを仕掛けていけばよいか、先生のお考えを聞かせていただきたいと思います。

有川　そうですね。「仕掛け」は非常に大事だと考えています。先ほど述べたロッカーの撤去も「あなたたちを信用しています」という一つの仕掛けだといえます。昔でしたら、「図書館では静粛に」と言われており、もちろん静粛な環境は大事なのですが、一方で、利用者にはさまざまな要求や動機があるはずです。現在、中央図書館のリフレッシュルームでは、飲食が可能ですし、ラーニング・コモンズの「きゅうとコモンズ」では、テーブルを自由にアレンジできたり、グループでディスカッションしたり、先生が授業に使うこともできます。さまざまな形態がシームレスにあって、本当に図書館に行ったら何でもできるということにした方が良い。そうすると、大学の生活の中に、図書館という勉強の場を中心に置くことになります。若い頃は、ほんのわずかなきっかけで勉強に対するモチベーションが違ってくるものです。そこで学問の世界へと誘うさりげない仕掛けをしてあげることは、図書館として非常に大事なことだと思います。

　いわゆる物理的空間を持つ「場」だけではなく、サイバースペースという意味での「場」もあると思います。そこでは、また異なる観点からの面白い関係を、教員も交えながら構築できるのではないかと思います。講義資料や教材のデジタル化が進むにつれ、ネットワーク上での管理になじんでゆきます。さらに、授業に出た学生が講義ノートをアーカイブすることもできる。アーカイブされた資料が次の年にまた使われるということを何回かやれば、最終的には教科書を出版できます。このような教材開発支援においては、図書館が機関リポジトリの仕事の中で得てきたノウハウを生かすことも可能ではないでしょうか。

片岡　私は図書館でシステム全般を担当しており、電子的なサービスをするためのシステムをどうしていくかということに携わっています。国内では海外の大学図書館に比べ、システムに関する予算とか人員の面で若干少ないのではと言われていると思うのですが、その辺りにつきましてはどのようにお考えでしょうか。

有川　九州大学の場合ですと、情報基盤研究開発センター、情報統括本部との緊密な連携体制ができていると思っています。情報基盤研究開発センターでは大学内全体の情報化を進めなければなりませんので、図書館のことばかりをやっていただくわけにはいきませんが、そこはうまく連携していくことが重要でしょう。

片岡　もう一つ違う話題ですが、日本国内でどのような電子ジャーナル、電子ブックがあるのかという情報について、大学間で情報共有が進んでいない状況があると思います。その辺りに関して、私たちが取り組むべきことについてもアドバイスいただけますでしょうか。

有川　電子ジャーナルに関しては日本国内でも関心が高く、比較的情報を得やすい状況ですが、電子ブックはまだそういう段階になっていないと思います。図書館から周知していくことが必要でしょう。また今後は、図書館における書籍のデジタル化も進めなければならないと考えています。作業にあたっては、複数機関で範囲を定め分担することも考えていかなければならないでしょう。

　出版の在り方自体も、少し変わってくると思います。最近は評判になったブログが書籍として出版されることがありますが、学術図書、論文の世界でも同様のことが起きてくるのではないかと思います。

星子　大学における社会連携の重要性は一般的にもよく言われています。九州大学の新キャンパスの構想においても、地域社会と調和したキャンパスづくりの計画が進められているかと思います。そのような中で、図書館における地域社会との交流や地域への連携について、お話を伺いたいと思います。また、私は有川先生が図書館長でいらっしゃった当時、オーストラリアのブリスベンへ６か月間の研修に行かせていただいたことがありますので、国際交流に関しても、今後の展望をお聞かせいただければと思います。

有川　図書館と地域社会との連携ということですと、地域の図書館が集める資料と大学図書館が集める資料はずいぶん違います。例えば大学図書館の一角に地域の図書館の分室があり、九大の資料と一緒に閲覧、貸出すれば、市民の利用者が増え、大学図書館の利便性を感じていただけるようになると思います。そのよう

な場合、地域の図書館から職員を派遣してもらう形をとれば、地域の図書館職員にとって研修の機会にもなります。大学図書館を研修の場所として利用いただくことは、地域連携、社会連携にもつながりますし、これからの大学図書館における新しいファンクションとしても重要だと考えています。

国際交流に関してですが、海外の図書館との協定は、少なくとも国立大学においては、九州大学とソウル大学校中央図書館が締結したのが最初です。その後、慶北大学校や台湾大学とも協定を結びました。最近は台湾大学での調査の結果を、『台湾大学所蔵和本善本目録』として出版するなど、具体的な成果も出ております。カナダのトロント大学とも協定を結んでいますが、これはここにいる片岡さんが3か月ほど滞在したことがきっかけとなっており、その後私が一人で出かけていって交渉しました。

海外の大学と協定を結ぶ時は、「こちらから何がしてあげられるか」を常に考えます。とはいえ、こちらからできることは、なかなかないんですよ。そういう意味では、日本の大学図書館はいまだに高度化していない。相互的に役に立つWin-Winの関係を見つけて、維持できるようにしなければならないと思っています。

九州大学伊都キャンパスラーニングコモンズ
「嚶鳴天空広場 "Q-Commons"」

さらに、海外との交流においてネックとなるのは時差だと思います。その点で私が最近関心を持っているのは、時差が少ない地域との交流です。たとえばブリスベンと日本では時差が1時間しかありませんから、勤務時間帯に大きなずれがなく、日本国内にいるのと同じ感覚で連絡を取り合うことができます。

渡邊　国際交流のお話で、日本の大学図書館がまだ高度化していない、こちらからできることが少ないというお話もございましたし、先程は、図書館職員が大学の中枢であるという意識を持たなければならないというお話も伺いました。そのような高度化した図書館を作るためには、そこで働く我々図書館職員の専門性の問題に行き着くかと思います。有川先生は館長時代より、「諸外国で言われるサブジェクト・ライブラリアンの制度が、日本では制度として定着していない。専門司書という部門を顕在化させることが、研究者に信頼される図書館として不可欠だ」とおっしゃっていました。

現在、九州大学では、「ライブラリーサイエンス専攻」という大学院の設置計画があり、我々図書館職員も構想の段階から少し関わっております。サービスの高度化に向けた専門職員養成について、先生のお考えを伺わせていただきたいと思います。

有川　図書館における業務委託の流れは強くなりつつありますが、大学図書館でなければできないこと、時間をかけてしつこくやらなければできないことがあると思っていまして、究極的に大学図書館と、それ以外の図書館とで何が違うのか、長い間考えてきました。

そうして考えてきたことのひとつがサブジェクト・ライブラリアンで、大学図書館職員にはもう少しフィールドに関する専門性があって良いと思っています。例えば大学が持っている古い資料について、ある程度判っている人がいないといけないと思っています。大学内にその分野をやっている研究者がいる時は、その人を頼れば良いけれども、研究者の関心は世代が替わるとともに変化してゆきます。研究者ではないけれども、所蔵している資料に対する知識があり、何が足りていないのかを判っているような人が必要だと思います。

サブジェクト・ライブラリアンを育成する場合、彼らのキャリア・パスについても考える必要があります。管理職的な業務であれば職場を移っていけばいいけれども、サブジェクト・ライブラリアンの特定領域に関する知識は、職場を移ったから今度はそちらに切り替える、というわけにはいかない。そうなると、図書館職員と教員の境目がない世界へと向かっていくように思いますし、そのような人材を養成するための大学院も必要になってくると思います。大学院では、図書館職員が学生であったり、あるいは、教員としてライブラリーサイエンス専攻を教える立場であったりする。一方、各部局の先生達には、サブジェクトに関する授業に協力してもらう、というような非常に面白い流れになってきて、この点でも、境目のない世界ができ、大学図書館の中でも高度な職場になると思うのです。また、ライブラリーサイエンス専攻の学生は、実習のフィールドとしてカウンターに出てみたり、レファレンスをやったりする。ちょうど医学部と附属病院のような関係ができればと思っています。さらに、市民が何か新しいことについてちょっと教えてもらいたい時に、最寄りの大学図書館に足を運ぶようになればという願いもあり、ライブラリーサイエンス専攻の卒業生に期待されるものとして、この点でも大きな展開をする可能性があると思っています。

「ライブラリーサイエンス」という言葉についてですが、これを「図書館学専攻」と言いますと、ちょっと古いイメージに引っぱられるように思います。カタカナにしたことで、従来の枠組みではなく、統合新領域学府[1]のようなところで新しい知を統合してやらなければならない新たな分野なのだというメッセージを込めています。

注

1）統合新領域学府：2009年4月に新設された九州大学の大学院。「知の統合」をコンセプトに、分野の垣根を越えた交流により、現代の科学や社会の重要課題の解決や、高度な専門的人材の育成を目指す。

本誌第九号インタビューの後編をお届けします。濵﨑修一事務部長、渡邊由紀子eリソースサービス室長、堀優子企画係長、片岡真情報システム部専門職員、星子奈美リポジトリ係員の皆様には、ご協力感謝申し上げます。